

新しい住生活を巡ってイメージされた戦前日本の組立住宅と設備デザイン

主査 野澤 俊太郎^{*1}

委員 小見山 陽介^{*2}

20 世紀初頭の日本において、組立構法および住宅設備は様々にイメージされ、デザインされた。在来構法ではなく、組立構法で以て壁体構造の住宅をデザインすることは、理想的で新しい住生活を生み出す手段として認識された。そして、電気設備、台所設備、暖房設備等を導入しようとする試みが、壁で囲われた空間の中に、住生活を巡る近代的快適性のイメージを具現化するプロジェクトとして機能したのである。本研究は、最終的に 1930 年代に見られたトロッケン・モンタージュ・パウ（乾式構法）の試みを再訪し、構法計画と設備デザインが融合していく様子を描く。

キーワード：1) 戦前日本，2) 組立住宅，3) 設備デザイン，4) 組立構法，5) 乾式構法，
6) トロッケン・モンタージュ・パウ，7) 住宅改良運動，8) 産業合理化，9) 規格化，10) 工業化

ENVISIONING PREFABRICATED HOUSING AND EQUIPMENT DESIGN FOR A NEW RESIDENTIAL LIFESTYLE IN PREWAR JAPAN

Ch. Shuntaro Nozawa

Mem. Yosuke Komiya

Prefabrication techniques and modern amenities were envisioned and designed in various ways in early-twentieth-century Japan. Designing a novel, walled house with prefabricated—rather than conventional post-and-beam—construction was viewed as a way to create an ideal new residential lifestyle. The introduction of electrical, kitchen, and heating equipment brought to life the image of modern comforts within the walled spaces. This article ends with a re-examination of modernist architects' endeavors to apply *Trocken Montagebau* (drywall construction) in the 1930s, demonstrating that these served as an impetus to integrate the design of prefabricated structures and equipment.

1. はじめに

日本において建築家が庶民住宅のあり方に目を向けるようになったのは、1910 年代から 1920 年代前半にかけて見られた住宅改良運動の頃である。戦間期になると、必ずしも持家が一般的ではなかったが、彼らの顧客となりうる都市中間層が台頭し、合理的住生活を志向した様々な住宅デザインが実践されるようになる。

本研究は、そのような文脈の中で建築家が関心を寄せるようになったプレファブリケーションによる組立住宅と設備デザインに係る試みを再評価するものである。設備デザインについては、とりわけ電気設備、台所設備、暖房設備に触れる。それらが新しい住生活の創造という住宅改良運動以来の課題と結びつけられながら、如何に解釈され、イメージされたかを詳述する。建築家などのデザイナーたちによってイメージされた組立住宅や設備デザインのあり方が如何に人々の住生活に対する理想や憧れと結びついてきたかについても考察を行う。そして

究極的には、組立住宅を可能にする構法デザインと設備デザインが融合していく様子を捉える。

以上の研究課題に答えていくための糸口が関連する既往研究の中に散見される。例えば、近代日本の独立住宅に係る内田青蔵の研究は、在来の塗り壁から西洋住宅を成す大壁への転換が、当時住宅を手がけた建築家たちにとって構法上の主たる関心の 1 つであったことを示唆している^{文 1)}。実際、住宅改良運動の頃にアメリカの組立住宅が注目される一方、大工による施工のし易さ等を考慮し、大壁を模した真壁による住宅作品が生み出されるようになった^{文 2)}。高橋らは、1930 年代に見られた乾式壁による住宅作品の壁体構造と材料について分析を行い、それらの中に断熱効果に係る萌芽的検討の一片を見出している^{文 3)}。この他、田中厚子による土浦亀城のモノグラフは、同年代に土浦がヴァルター・グロピウスの提唱するトロッケン・モンタージュ・パウ（ドイツ語で乾式構法を意味する）から着想を得て手がけた木造乾式住宅

^{*1} 東京大学 特任助教 PhD (建築学) ^{*2} 京都大学 講師 博士 (工学)

を含む住宅作品の理念に迫っている^{文4)}。土浦の新しい構法や設備デザインに対する関心は、彼自身を含む都市中間層の趣味や心持ちに相応しい、新しい住生活を導きたいという彼の戦略的思考に由来したのである。

以上の既往研究は、乾式壁で住宅をデザインしようとする試みと住宅設備デザインの黎明がほとんど同じタイミングで起ったことを物語っている。他方、乾式壁をもたらず構法と住宅設備デザインの関係性については、これまで周知的な事象として必ずしも関心が注がれることはなかった。それが建築学という学問の中心的テーマではなかったということに由来するのであれば、本研究のように、建築家による作品や言説のみならず、同時代の住宅電気設備に係る動向から家具デザインの世界に至るまで、建築学の周辺に目を向けることは意義のあることであろう。本研究は、雑誌『住宅』『新建築』『国際建築』等の戦前に刊行された建築系雑誌のみならず、東京電気（現在の東芝）発行『マツダ新報』（発行年 1914-1944）などの電気系商業誌および関連する刊行物を用いて、図らずしも分野横断的な分析を展開するのである。

この他、土浦亀城が残した図面の数々、並びに 1928（昭和 3）年に結成された型而工房と称する工芸集団の旧蔵資料が本研究の資料群を成す。この型而工房に関する一群の資料を残したのは、同人の 1 人として主導的な役割を果たした家具デザイナーの豊口克平である。豊口は、工房を主宰する建築家蔵田周忠らとともに、テーブルセット、洋服筆筒、厨房家具等の試作および販売に取り組み、家具製作の工業化に資するデザインのあり方を模索したことで知られている^{文5)}。豊口が残した旧蔵資料には、家具類の図面、スケッチ、製作上の記録や参考資料の他、可合成住宅と命名された 1934（昭和 9）年提案の乾式住宅案の青図が含まれている。

本研究の構成は次のとおりである。まず第 2 章では、住宅改良運動の頃に見られたアメリカの組立住宅に対する関心とその背後に横たわるロジックを再精査する。そして、住宅改良という文脈において如何に組立構法が認識上発見されたかを概観する。続く第 3 章では、1920 年代の住宅電気設備を巡る展開を整理し、住宅設備デザインに対する要求が如何にして芽生えたかを描く。

第 4 章および第 5 章では、おそらく日本で初めて市販を想定して開発された 1928 年発表の新建築社組立住宅、並びに型而工房の可合成住宅に焦点を当てる。関東大震災からの復興や昭和金融恐慌後の産業合理化に対する要求等が如何に組立構法および設備に係るデザイン思考に影響を与えたかを詳らかにする。他方、第 3 章から第 5 章にかけては、組立構法や設備デザインによって実現される理想的（とされる）住まい像や住生活像が如何に人々の住意識と結びつき、新建築社や型而工房による様々な取り組みの原動力となっていたかについても目を配る。

前章と同様の考察を第 6 章でも行う。この章では、主に豊口および土浦によるトロッケン・モンタージュ・バウの試みについて取り上げる。これらの 1930 年代に見られた事例の考察では、組立構法と設備デザインの統合に関心が寄せられる。本研究を通じて、住生活のイメージと組立構法、設備デザインを結びつけるデザイン思考が如何に移り変わり、あるいは蓄積していったかを俯瞰し、戦後における住宅部材の部品化や住宅工業化にどのような影響を与えたかについて論じる。

ここで、用語の定義を整理する。本研究では、プレファブリケーションによる構法を「組立構法」と総称する。そして「組立構法」によって出来るあらゆる（主として独立）住宅を「組立住宅」と表す。「乾式構法」「乾式住宅」と呼ばれるものは事実上「組立構法」「組立住宅」に属し、厳密には湿式構法以外の全ての構法が「乾式構法」に含まれる。但し、本研究では、グロピウスが想定した使用材料はさておき、「乾式構法」と「トロッケン・モンタージュ・バウ」を建築術上の同義と見なす。すなわち、構造材としての軸組と非耐力壁の組み合わせによる構法および住宅に対してのみ「乾式構法」「乾式住宅」の語を用いることにする。戦前において、本研究で言うところの「乾式構法」は、やはり同様の曖昧さを持って「乾構造」「乾構築」などと呼ばれていたのである。

他方、本研究に登場するアメリカ由来の枠組壁構法、すなわち耐力壁による構法については、今日同様に「ツーバイフォー構法」と称する。なお、本研究に登場する住宅は全て木造である。

2. 「楽しき住家」としての組立住宅

近代日本における組立住宅への最初期の関心は、アメリカに見られる住宅および住生活を日本にもたらそうとする試みの中から芽生える。それらの試みに関わっていたのは必ずしも建築家ではなかったが、大正デモクラシーと呼ばれる民主的な雰囲気の中で、住宅改良への機運を醸成する役割を担った人々であった。

その 1 人に、自由主義の教育を標榜し、1921（大正 10）年に与謝野晶子らと文化学院を設立したことで知られる文化人の西村伊作がいる。アメリカの住宅および住生活を日本でも実現させようとする西村の試みは、当初全く個人的な理由によるものであった。彼は自身の子息のために文化学院を設立したのと同様、自身が理想とする住宅を創ろうと独学で住宅設計を学び、アメリカの住宅を模範とするようになったのである^{文6)}。舶来品に囲まれた裕福な家庭に生まれ、プロテスタンティズムの影響を受けたとされる西村の目には、座敷を中心とする日本古来の住宅が幾分と封建的に映っていたようだ^{文7)}。

西村がとりわけ関心を寄せたのは、当時アメリカで普及していたバンガローと呼ばれる木造住宅であった。そ

れは傾斜屋根や庇と一体化したベランダ等を特徴とする形式で、主に家族向け郊外用住居のデザインとして広く受容されていた^{文8)}。1900年代後半から工場生産によるメール・オーダー住宅、いわゆる通販住宅が出回るようになると、バンガローが最も人気のある形式として全米の大都市郊外を埋め尽くすようになっていた^{文9)}。西村はその簡素な構造による居間中心のプランの中に家族主義の精神を見出すとともに、日本古来の住宅との素材および形態上の類似性から「我々が西洋風生活に入るのには、此のバンガローが一番よい」と考えていたのである^{文10)}。このような主張を展開した1919（大正8）年出版の自著『楽しい住家』は、大正期の民主的な雰囲気の中で大きな反響を呼んだと見られ、5年後に新装版『現代人の新住家』として版を重ねている^{文11)}。

アメリカにおいてバンガローが建築生産上プレファブリケーションと深く結びついていたことは、当初西村のバンガローに対する認識にも少なからぬ影響を与えたようだ。その一断面を彼が22歳のときに故郷紀州新宮の丘に建てた自邸のバンガローに見出すことができる。西村は文化学院創設と同年に建築事務所を設立するのであるが、結果として彼の処女作となったこの1906（明治39）年竣工の平屋建住宅において、在来構法ではなくツーバイフォー構法が採用されたのである（図2-1）^{注1)}。さらに、2年後の増改築に際してもツーバイフォー構法が用いられたとされている^{文12)}。若かりし頃の西村の中では、家庭的な住生活の創造という目的とアメリカでバンガローを生み出していた組立構法という手段が不可分に結びついていたのである。

西村がどの程度組立構法としてのバンガローから住宅作品の可能性を広げようとしていたかは定かではない。ただ本来は、居間中心の平面形や家族的な住生活の創造という目的に対して、バンガローのデザインは疎か、組立構法が用いられる必要もない。西村の処女作に垣間見えるバンガロー、さらにはツーバイフォー構法に対するある種の様式主義的関心は、この独学による建築家がどこから建築を学んでいたかということと関係している。西村の本棚に並んでいたのは『Ladies' Home Journal』（1883年創刊）や『House and Garden』（1905年）などといった、住宅のデザインやプランなどを紹介するアメリカの一般向け住宅専門雑誌、いわゆるパターンブックであった^{注2)}。それらはメール・オーダー住宅の広告などと同様、合理的な造りを持つバンガローが如何に家族での居住に相応しいかを喧伝するメディアとして機能していたのである。西村はそれらの雑誌に掲載された家族団欒の様子を描いた挿絵やツーバイフォー構法の解説図から「楽しい住家」としてのバンガローのイメージを汲み取っていたのであろう。

同時期、西村と似たような発想でアメリカから組立住

宅を輸入した実業家がいた。1901（明治34）年にシアトルに移り住み古着商としてビジネスを展開していた実業家の橋口信助は、アメリカの住生活の合理性を肌身で体感する中で、それを日本でも実現させたいと考えるようになる。彼は帰国時に持ち帰ったバンガローを含むメール・オーダー住宅のセット6戸分を元手に、1909（明治43）年に洋風住宅の設計施工や家具製作などを手がける住宅会社あめりか屋を興す（図2-1）。輸入住宅販売が同社の主業にはならなかったと見られるが、橋口が組立構法に係る見聞を多少なりとも有していたことは、黎明期の同社の経営方針に少なからぬ影響を与えたようだ。同社は1910年代を通じて、アメリカの住宅に見られる大壁のデザインに取り組み、壁体構造で合理的な住生活を生み出そうと試みていたのである^{注3)}。



図2-1 1906年竣工の西村伊作自邸（左）および1910年頃に建てられたあめりか屋の輸入住宅（右）

橋口が日本に持ち帰ったのは組立構法や大壁のデザインだけではなく。1914（大正3）年に合理的な住生活に係る啓蒙活動を目的に住宅改良会を設立すると、その2年後に西村伊作の教科書でもあった『Ladies' Home Journal』や『House and Garden』に倣って同会雑誌『住宅』の創刊したのである^{注4)}。同雑誌は、あめりか屋の広告塔としての役割もさることながら、当時の住生活上の諸問題、例えば二重生活などと呼ばれた課題に対して解決策を示すという社会的使命を担っていた。住宅改良会の顧問に名を連ねた建築家武田五一、佐藤功一、家政学者三角錫子らの目には、和服と洋服、床座とイス座の生活が混在する二重生活が不経済と不合理の根源に映ったのである。雑誌『住宅』に期待された役割とは、この二重生活解消への道りとして、起坐様式や室の使い方などが洋式に統一された住宅および住生活のイメージを押し広めることであった。橋口がアメリカから持ち帰ったのは、西村にツーバイフォー構法と家庭的な住生活のイメージを暗黙のうちに結び付けさせたような、メディアというシステム、そして力であった。

当時の日本において、アメリカのパターンブックなどに掲載された住宅のデザインやプランを解釈することと新しい住生活を創造することが同義であったことは想像に難くない。1922（大正11）年平和記念東京博覧会の呼び物でもあった建築学会主催『改良住宅の実物展』は、そのような解釈の対象が組立構法にも及んでいたことを示唆している。住宅改良運動のクライマックスを象徴す

る展示住宅 14 棟のうち、小澤慎太郎出品住宅が「米國で流行」しているという「バルン式」(バルーン・フレーム構法)で、飯田徳三郎出品住宅が「米國のレーダーカット式」による組立構法で建てられたのである(図 2-2)^{文 13)}。このうち、家具製作業を営む小澤慎太郎の作品は、1920 (大正 9) 年に文部省が設置した生活改善同盟会が主張する家族本位のイス座空間という理念を文字通りに表現している^{文 14)}。他の出品住宅同様にイス座空間を主体とし、大熊喜邦設計の生活改善同盟会出品住宅やあめりか屋出品住宅等に散見された居間中心の平面形を特徴としたのである^{注 5)}。



図 2-2 1922 年『改良住宅の実物展』で展示された小澤慎太郎出品住宅の外観(左)と居間(右)

実際に展示されるのはこれらの住宅のデザインやプランであるにもかかわらず、小澤や飯田がわざわざ組立構法を採用したという点に、西村の処女作にも共通する様式主義的ロジックが垣間見える。おそらくこれが住宅改良運動期におけるデザイン思考の一傾向なのであろう。合理的で家庭的な住生活を創造することとアメリカに見られた組立構法を検討することが、彼ら「住宅改良家」たちの認識において緩やかに結びついていたのである。

3. 「住み良い家」のイメージと住宅電気設備

住宅改良運動が目撃したのは、大壁のデザインや組立構法によって生み出される壁(あるいは面)で合理的で家庭的な住生活をデザインしようとする試みの数々であった。他方、1920 年代に入ると、壁で囲われた空間に対して直接的な影響関係を持つ住宅設備への関心が高まりを見せるようになる。それは科学技術の応用によって人々の生活の能率化を図ろうとする当時の革新主義的とも言える社会動向と無関係ではなかった^{文 15)}。

そのような風潮を助長していた運動の 1 つとして、1923 (大正 12) 年の関東大震災以降活発に展開された住生活の電化に係るキャンペーンが挙げられる。当時、都市部では大半の住宅に電灯が灯るようになっていたものの、庶民住宅に配線、スイッチ、コンセント等の電気設備が完備されていることは稀であった。天井から電灯が数個ぶら下がり、アイロン等を使用する場合は、電灯用のソケットから電気を供給するのが一般的であった^{文 16)}。家庭電化を目指す電気技術者たちや住宅改良を目指す家政学者たちの目には、日本の住宅が電気設備の恩恵を最大限享受するには程遠い代物に映ったのである。

1924 (大正 13) 年秋頃に一般公開された電気ホームと称されるモデル電化住宅は、彼ら専門家が抱く理想的な電化生活を体現したメディアであった(図 3-1)^{文 17)}。この東京田園調布に現れたおそらく日本初のオール電化住宅の一般公開は、当時全米各地で展開されていたホーム・エレクトリックなどと称されるモデル電化住宅の展示に倣ったものであった^{文 18)}。同イベントを主催したのは、田園都市株式会社(後の東急)、照明設備を担当した東京電気、設備設計全般を手がけた芝浦製作所(いずれも後の東芝)、家具と調度品を担当した三越呉服店などであった^{文 19)}。クリーム色を基調とするスタッコ仕上げの外観と陸屋根を特徴とするこの総 2 階建ての住宅のデザインは、あめりか屋の建築家山本拙郎の作品であった^{注 6)}。

この電気ホームが何を以て見物人たちを魅了したかと言えば、それは従来の日本の住宅にはない近代的快適さのイメージ、そして体験であった。第一、このモデル電化住宅には、当時の庶民住宅には付き物であった薄暗さという感覚が無かった。至る所に取られた大きな窓が最大限の採光を約束するとともに、洋室のブラケットライト、大小様々なスタンドライトをはじめ、全ての室と共用部に散りばめられた計 52 の人工照明が明るい夜を保証していた^{注 7)}。他方、足元に目をやると、各部屋に配された最新式の電気暖房が、冬の住生活は寒いものと決めつける大衆の固定観念に挑戦している。見物人たちが自分たちの家との違いを最も痛感したところがあったとすれば、その 1 つが白い壁の台所であったことは想像に難くない。この白さは電気ホームの衛生思想を象徴していた。竈門や七輪に代わって電熱調理機器が小綺麗に配されたこの白い壁の台所は、もはや炊事が煤や直火との戦いではないことを暗示していたのである(図 3-1)。



図 3-1 1924 年に展示された電気ホームの外観(左)、台所(中)、女中室(右)

これらの電気機器の使用を可能にする配線の類は、大壁を模した真壁の中にひっそりと仕舞われた^{文 20)}。この電気ホームの設備設計を手がけた電気技術者たちは住宅改良家たちと同じくらい、壁(あるいは面)が持ち得る近代的意味合いについて先見的であったと言えるかもしれない。両者とも壁で囲まれた空間の中に便利さや快適さ、あるいは省力的な家事がもたらす余暇の雰囲気思い描いていたに違いないが、電気技術者たちは配線という文字通りの隠し味を持っていたのである。詰まるところ、彼らがそれらを駆使することによって始めて、電

気ホームは生産というよりもむしろ消費の場としての住宅のイメージを演出し得たのである。

電気ホームのような実物のメディアは、百貨店等の展覧会として街中にも出現した^{注8)}。主にそれらのイベントを主催および後援していたのは、電力供給事業者等により1924年に結成された家庭電気普及会であった。例えば、同会と照明学会が共催した1928（昭和3）年2月の『電燈照明と応用の会』は、会場となった東京三越呉服店を訪れる買い物客の興味をそそった。4階の催し物会場には通路を成すように電気設備の施された玄関、客間、居間、食堂などの模型が並べられ、『光の一日』と称する原寸大の日本間が見物人たちを待ち構えていた。和服女性のマネキンが置かれたこの畳敷の空間において、和室固有と思われていたであろう薄暗さを払拭するかの如く、快適さや温かみを彷彿させる様々な照明効果のデモンストレーションが行われたのである^{文21)}。このようにして、見物人たちの中に電気設備による便利で快適な消費空間として住宅のイメージが植え付けられ、とりわけ都市中間層の住生活に対する憧れが醸成されていったのである。

『電燈照明と応用の会』の翌年、家庭電気普及会は日本の住宅を電気消費の場へと転換するプログラムとして『住み良い家の電気仕様書』を作成する。同仕様書は、室の用途や面積等に応じて電灯やプラグの数、明るさなどの基準を定めたもので、中流家庭の住宅並びに生活規模を想定していた^{文22)}。換言すれば、電気ホームや家庭電気普及会の各種展覧会が具現化していたような憧れの電化生活のイメージが下敷きになっていたのである。

戦間期の住生活電化キャンペーンによって、実際にどの程度人々の生活が電化したかを正確に把握するのは困難である。しかし、当時借家住まいが主流であったことを踏まえると、大家たちがスイッチやコンセントなどといった一般の住宅に存在すらしていなかったような造作に対して、進んで追加投資するようになったとは考え難いのである。それでも、住生活電化キャンペーンが住宅設計や施工のあり方、ひいては住宅そのものの意味に与えた認識上の影響を過小評価することはできない。壁（あるいは面）で囲われた住空間に（電気）消費の場としての「住み良い家」のイメージが投影されたとき、今度はその具現化を目指すべく、（電気）設備計画という発想が芽生えるようになったのである。

4. 大量生産への関心と新建築社組立住宅

1920年代中頃から勢いを得た住生活電化キャンペーンは、科学技術で以て人間生活に科学的進歩をもたらそうとする革新主義的信条を内在していた。そのような発想が同年代に効力を持つに至った理由の1つに、社会主義の台頭といったイデオロギー上の要因を挙げることが道理を得ていると言える。他方、革新主義的主張に対し

て些かの信憑性を与えていたのは、ロシア革命ではなく、むしろアメリカの資本主義的成功であったように見える。科学技術の恩恵を短期間のうちに民主化し得るということ、しかも受益者の負担をある程度抑えたかたちで実現し得るということを、1910年代のうちにT型フォードが証明してみせたのである。斯して、人間生活の質的向上を可能にする社会経済的条件として、工場生産かつ大量生産が極めて肯定的に捉えられるようになったのである。

近代日本において住生活の改良という観点から大量生産に関心が寄せられるようになったのは、おそらく家具製作の世界が嚆矢であった。その片鱗を、住宅改善調査委員として生活改善同盟会に携わり、工業製品のデザイン、すなわち工芸という新しい領域を切り拓いた家具デザイナー木曾一の足跡に見ることができる。木曾が1921（大正10）年に文部省在外研究員としてアメリカに渡ったのは、家具の大量生産のあり方、とりわけ生産方式と直接関係を有する家具の科学的デザインを学ぶためであった^{文23)}。木曾は、台頭する都市中間層に対して安価な洋風家具を大量に供給することで、彼らの生活の質的向上、ひいては近代化が達成し得ると考えたのである。

1920年代中頃になると、今度は建築家の南信が木曾と同様の発想で小住宅の工業化を主張する。南は、遠藤新や土浦亀城らとともにフランク・ロイド・ライト設計の帝国ホテルの建設に携わった建築家の1人であった。帝国ホテル竣工の翌年、1924年に活躍の場を関西に移し、遠藤とともに兵庫県芦屋にあるライト設計の山邑邸を完成させている^{文24)}。

そのような南が1926（昭和元）年に「組立住宅の話」と題する論考を発表したのは、当時大阪に拠点のあった新建築社の雑誌『新建築』であった。南による分析はこうである。アメリカでは都市人口の増加、ヨーロッパでは第一次大戦からの復興という社会的課題が、それぞれ組立住宅の発展を促している。他方、日本では建築を芸術の一部と見なす傾向があることから、建築家たちが住宅の工業化について議論することに消極的である。南は、住宅工業化の意義として、工場生産による住宅部材の質的向上と住宅価格の低廉化を力説する。そして、住宅の工業化、ひいては商品化を「建築家の墜落だとするならば、市井に立ち列んで行く、商品以下の建築をながめて居る事はどうでせう」と高唱するのである^{文25)}。

南がこう主張した1926年頃から、新建築社において独自で組立住宅の開発が進められ、最終的に2階建ての中流住宅および夏の家と称する平家建ての休暇用コテージの2商品が編み出される^{文26)}。それらは1928年5月に大阪三越で開催された同社主催の展覧会『住みよき家の資料の会』でお披露目される。藤井厚二、安井武雄、石本喜久治らの住宅作品の写真や図面などとともに、新建築社組立住宅の実物見本が展示されたのである^{文27)}。

新建築社にとってこの2度目となる展覧会は、例えば堀口捨己や山田守ら率いる分離派建築会が、1920年の結成以来同じく百貨店で開催していた作品展とは趣を異にしていた。家庭電気普及会の仕様書と同様「住みよき家」という文言を冠していたように、この展覧会が新しい住生活の創造、あるいはそのためのイメージづくりを意図していたことは疑いない。実際に見て、触って、中に入ることのできた新建築社組立住宅の実物見本は、それらの工場生産による箱が、如何に構造と住生活の両面において質が高く、かつ安価に製造し得るかということをアピールしていたのである。換言すれば、組立住宅、工場生産、大量生産などといったキーワードと「住みよき家」の快適な住生活のイメージを認識上結び付ける視覚的かつ感覚的メディアとして機能したのである。

中流住宅タイプの施工例である1928年施工の籠田邸は、新建築社組立住宅の仕様を若干ながら浮かび上がらせている(図4-1)。兵庫県内の郊外住宅地に建てられたこのハーフティンバー風の住宅は、1階部分が茶の間と女中部屋以外全て板張りの中廊下型平面となっており、2階には和室2つとベッドが置ける洋室が1つあった。プランからしてモジュールは尺貫法であったと推測される。籠田邸を紹介する1928年12月号の『新建築』によれば、主要構造材として「主としてラワン材」が用いられたとある^{文28)}。しかし、ラワン材は通常家具などに用いられ構造材としては適さないことから、正しくはレッドラワンであったと推測される。いずれにしても、当時としては珍しく住宅部材として南洋材が用いられたようだ。住宅部材の工場生産が試みられる中、家具製作等の異分野の技術が応用された結果とも捉え得るのである。



図4-1 1928年に建てられた新建築社組立住宅籠田邸の外観(左)と2階客間(右)

そして、南が新建築社組立住宅の企画に直接携わっていたという前提において、この中流住宅に乾式構法が採用されたという推論が許されるようだ。実際、南の住宅作品のうち、1932(昭和7)年頃に完成した自邸(通称鹿姑居)およびその相似形とも言える1934(昭和9)年竣工の高田邸がいずれも乾式構法で建てられているのである^{注9)}。しかし、実のところ、南と新建築社の関係を明らかにできるほどの資料が今のところ存在しない。唯一明らかになっているのが、夏の家と呼ばれるタイプの同社組立住宅、南自邸、高田邸に共通する丸窓のデザインが驚くほど似ているという事実のみである(図4-2)。

新建築社組立住宅がどれほど売れたのかも知られていない。ただ、そういう情報がないところからして、おそらく時宜を得なかったであろうことが想像される。それでも、南信、そして新建築社の組立住宅に対する関心は特筆に値する。なぜなら、組立構法それ自体のイメージのされ方に変化の兆しが現れたことを物語っているからである。住宅改良家たちが合理的で家庭的な住生活を生み出す手段と見なしていた組立構法の中に、南や新建築社は大量生産可能性というポテンシャルをよりはっきりと意識するようになったのである。

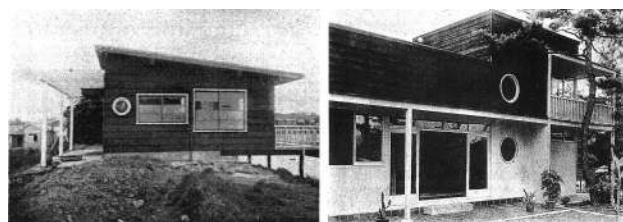


図4-2 新建築社組立住宅夏の家(左)および1932年頃竣工の南信設計鹿姑居(右)

5. 規格化によるデザインと型而工房可合成住宅

新建築社が組立住宅の開発に着手した翌年、折しも1930年代に続く産業合理化政策の契機となる昭和金融恐慌が起こる。その年のうちに商工審議会が、翌1928年に商工省工芸指導所が設置されると、家具デザイナーや建築家等の間で、大量生産に資する合理的デザインや生産システムを模索しようとする動きが活発になる。

そのような潮流の真っ只中で結成され、産業合理化施策のデザイン上の指針に直接的な影響を与えたとされるのが型而工房である^{注10)}。1928年に結成されたこの工芸集団の初期メンバーは、建築家の蔵田周忠、および彼の東京高等工芸学校(後の千葉大学工学部)の教え子たちであった。同校は日本初の工業デザインの高等教育機関として1922年に本格始動し、当時徐々に卒業生を輩出するようになっていた。1940(昭和15)年頃まで活動を展開した型而工房は、数人の脱退と新規加入があり、最終的には蔵田、商工省工芸指導所員の豊口克平、松本政雄、伊藤磯次郎、小林登、中島賢次、斉藤四郎、高橋実、手塚敬三の計9名に落ち着いたようだ^{注11)}。概して、蔵田および東京高等工芸学校の卒業生で構成された型而工房は、蔵田が同校で展開したデザイン教育によってその方向性が自ずと定まったようだ。蔵田の頭の中には常にバウハウスの存在があったのである^{文29)}。

型而工房の設立趣意は、住生活の標準化と家具生産の規格化であった^{注12)}。そこには、大量生産のために家具を規格化することで自ずと住生活に合理性がもたらされるというロジックが介在していた。そして彼らは、どこに標準を見出すべきか、というデザイン上の「形而上学的」検討を通じて、量産可能なテーブルセットや鋼製チューブチェアなどの「型」を探し求めたのである。彼らが「型

而工房」と名乗った由縁がここにある^{注13)}。

工房同人たちはまず、人間の身体と家具の関係から初源的な「型」のデータを抽出しようとする。豊口は、腰掛ける人間の体が如何に椅子にフィットしているかなどといった同人たちの人間工学的関心の中に、当時耳目を集めていた今和次郎による路上観察の方法論、いわゆる考現学（モデルノロヂオ）の影響を認めている^{注14)}。実際、同人たちは銀座松屋の売り場、取引先の事務所、さらには蔵田邸などで色々な椅子を見つけては、路上観察ならぬ実地計測を展開したようだ。計測を実施した場所には、改良住宅の実物展に組立住宅を出品した住宅改良家たる小澤慎太郎の家具製作会社も含まれていた^{文30)}。型而工房を途中で去った岩井良二と佐藤桂次がいずれも小澤慎太郎商店に入店していることから、工房同人たちの「型」の採取やプロトタイプ製作等において、同社が何らかの関わりを持っていたであろうことが想像され得るのである^{注15)}。

型而工房の活動は量産家具の試作のみに終始したわけではない。彼らは新作発表や販売に際して積極的にメディア戦略を展開し、とりわけ今後ますます家具が必要になるであろう都市中間層に対して、型而工房の製品と合理的住生活の「型」の関係を印象付けようとしたのである。それは、成果発表の場が雑誌『国際建築』などの建築系雑誌に留まらなかったことから明らかである。彼らは、中流の読者層をターゲットとする『婦人友』『婦人公論』等の女性雑誌においても論考を発表し、それらの雑誌の編集部と協力して通信販売を展開した^{文31)}。

加えて、約12年の活動期間を通して、百貨店、書店、文具店を会場にして計4回の展示会を開催している。例えば、1934（昭和9）年に日本橋高島屋で開催された『新標準住居室内装備展』と称する第3回展示会では、新建築社が『住みよき家の資料の会』で組立住宅の実物見本を呼び物にしたように、実物大の厨房モデルルームを大々的に展示した（図5-1）^{注16)}。それは今日で言うシステムキッチンの一提案であり、最新の立式ガスレンジやシンク等を取り囲むようにデザインされた立体的な食器棚が、合理的な家事労働の「型」を具現化していたのである。このような型而工房によるシステムキッチンの展示が、『婦人友』や『婦人公論』の読者層を成す中流女性たちに対して訴求力のあるメディアとして機能したであろうことは想像に難くない。

それまでも、住宅改良会の発起人の1人であった三角錫子がテイラーリズムを応用した台所デザインを模索するなど、台所改良の試みは着実に存在していた^{注17)}。型而工房の台所設備デザインもまたそれらの延長上にあるということを、その視覚的特徴が自ら主張しているように見える。あの白い壁の台所を持つ電気ホームの展示から10年経ってなお、型而工房の手がける食器棚の白さ



図5-1 1934年『新標準住居室内装備展』で展示された型而工房によるシステムキッチン

が相変わらず近代的衛生思想を訴え続けていたのである。

他方、工房同人たちが何を台所設備デザインの理想「型」と見なしていたかについて考えると、蔵田がドイツの合理主義建築を信奉していたという事実も無視できない。おそらく、同人たちは、エルンスト・マイが手がけたプレファブリケーションによる集合住宅の標準型キッチン、いわゆるフランクフルト・キッチンをイメージしていたのである。マイがそうしたように、彼らもまた、台所設備デザインと組立構法による住宅デザインを一体的に捉えようとしていたようだ。そのような型而工房のデザイン思考を『新標準住居室内装備展』と同年に作成された2つの提案から窺い知れる。1つは可合成住宅と称する組立構法の平家建小住宅（図5-2）であり^{文32)}、もう1つは（残された青図のタイトル曰く）「提案住宅」のための厨房デザインの提案（図5-3）である^{文33)}。

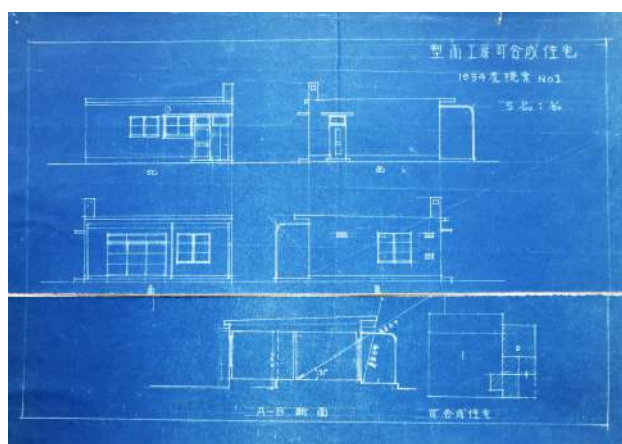


図5-2 1934年作成の型而工房可合成住宅案

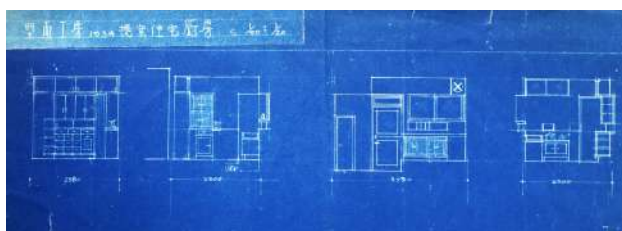


図5-3 1934年作成の型而工房「提案住宅」のための厨房デザイン案

住宅においても「名は体を表す」といった擬人的解釈が許されるのであれば、可合成住宅案はその名が乾式構法という体を示唆している。この「可合成」という名称は、1931（昭和6）年にマルティン・ワグナーが提唱した『成長する家』のコンセプトに由来しているようだ^{文34)}。この緩勾配の片流れ屋根を持つインターナショナル・スタイルの住宅は、大人2人、子ども2人の4人家族による生活を想定している。この住宅の「基本型」は正方形に近いプランを持ち、広々とした南面の居間を2つの寝室とサービス・スペースがL字型に取り囲んでいる。そして、変わりゆく住生活の要求に併せて「可合成型」への成長が必要になったとき、西側部分の拡張が期待できるという仕組みになっている。このような可変性を成立させるため、ワグナーの『成長する家』のプロトタイプ同様、乾式構法が想定されていたと考えられるのである。可合成住宅案は最後まで提案に留まったことから、工房同人たちがこの住宅を机椅子などと同様にどこまで市販化しようとしていたかは定かではない。しかしながら、この住宅が極めて単純な形状およびプランを持っていることからして、ある程度普及のさせ易さが意識されていたと見ることができる。

この可合成住宅案においても、標準あるいは「型」がそのデザインの背後に横たわっていたと考えられる。豊口が残した型而工房旧蔵資料の中に、私たちにそう考えさせる手書きの抜粋資料がある^{文35)}。出典は1931年4月号の建築学会雑誌『建築雑誌』に掲載された「生活最小限の住宅」と題する山田守の論考である。それは1929（昭和4）年から1930（昭和5）年にかけてヨーロッパ各国を巡った山田の帰朝講演を文章化したもので、ジードリンクの様子を日本に伝える貴重な資料であった^{文36)}。書き写しという行為がその行為者の意図を反映しているとすれば、この工房同人の何者かによる抜粋は示唆的である^{注18)}。そこに書き写されたのは、山田が出席した1929年第2回近代建築国際会議（CIAM）の『最小限住宅の住居展覧会』で示された最小限住宅の仕様であった。それによれば、専ら居住に用いられる室の合計床面積の標準は、最小14.7 m²（ベッド数1）、最大76.5 m²（ベッド数8）、平均51.4 m²（ベッド数4.5）となっている。4人家族向けの可合成住宅の「基本型」の床面積は56 m²であり、この最小限住宅の標準に概ね従っているのである。

工房同人たちは、家具や設備、ひいては住宅のあり方をイメージする際、第一に人間とモノの関係にまつわる標準、あるいは何らかの所与の基準を探し出し、それらを想像力の根源とする方法論を徹底していた。量産化に資するモノの規格化について習い、またはそのようなデザイン思考を強く意識していた彼らに対して、産業合理化政策がいよいよ実践の場を与えたのである。可合成住宅案が示唆するように、彼らの方法論において、家具製

作と住宅施工の間には何の違いも存在しなかった。換言すれば、彼らの中で大量生産を想定した家具の規格化と住生活の合理化が同義であったならば、大量生産を想定した乾式住宅の規格化と住生活の合理化もまた同義だったなのである。このような発想は、組立構法を合理的な住生活を生み出す手段と見なす住宅改良家たちのロジックと、実のところほとんど矛盾していなかったのである。

6. 組立構法と設備デザインの融合

型而工房可合成住宅案において乾式構法が想定されていたであろうという推論は、同時期に見られた量産可能な住宅を模索する建築家たちの試みを振り返ることでより確らしいということが判ってくる。どうやら、産業合理化の風潮が建築におけるモダニズムをより一層推し進めたようだ^{注19)}。グロピウスの提案する量産可能な乾式構法の住宅、いわゆるトロッケン・モンタージュ・バウの住宅に対する関心が高まりを見せ、1932年に市浦健、川喜田煉七郎、土浦亀城、型而工房主催の蔵田周忠らが日本トロッケンバウ研究会を設立するのである^{注20)}。トロッケン・モンタージュ・バウの住宅作品は1930年代に集中している。市浦、土浦、蔵田の他、山越邦彦などがインターナショナル・スタイルの住宅をトロッケン・モンタージュ・バウでデザインしている。

彼らの試みは、インターナショナル・スタイルの無装飾性ととともに、既製材料の活用という構法計画上のコンセプトにおいても共通していた。彼らの仕事はいずれも都市中間層のクライアントや自分の家族向けであったが、デザインと構法の一致および工場生産品の使用によって、インターナショナル・スタイルの住宅が量産化し得るというコスモポリタンの発想に裏打ちされていた^{文37)}。

可合成住宅案はあくまで不特定多数のクライアントを想定したものであったが、これが特定のクライアント向けの作品を下敷きに練られたものであったとしても不思議ではない。実のところ、1933（昭和8）年に豊口が手がけたトロッケン・モンタージュ・バウの住宅が、その翌年に作成された可合成住宅案と非常によく似たデザインおよびプランを持っている（図6-1）^{文38)}。この東京自由が丘に建てられた西村邸と可合成住宅案を比較したとき、サービス・スペースの配置や窓のつき方などに構成上の違いが認められる。加えて、可合成住宅案では型而工房の家具同様にメートル法が採用されているのに対し、西村邸では尺貫法が用いられているという違いもある。

しかし、これらの差異以上に重要なのは、可合成住宅案がほぼ間違いなく西村邸と同じ壁材を想定していたであろうという点である。西村邸の乾式壁には、外壁に石綿スレート板、内壁にテックスと呼ばれる植物繊維板が用いられたのである^{注21)}。

石綿スレート板を用いてインターナショナル・スタイ

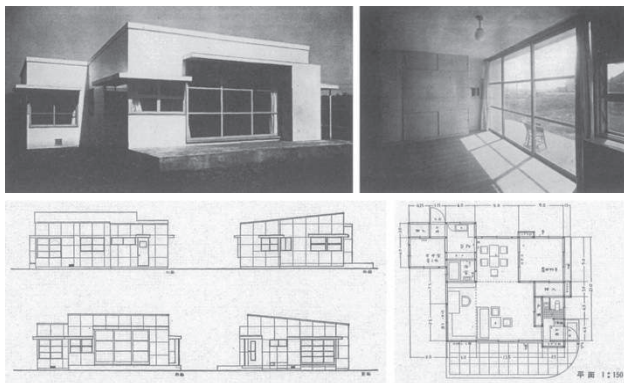


図 6-1 1933 年に建てられた豊口克平設計西村邸の外観（左上）、居間（右上）、立面図（左下）、平面図（右下）

ルの陸屋根と白さを表現しようとするアプローチは、市浦と土浦がお互いに知恵を出し合ってデザインした 1931 年竣工の各々の自邸が嚆矢である^{文 39)}。1923 年から 1926 年までフランク・ロイド・ライトの事務所で過ごした土浦は、テキスタイル・ブロック造の住宅プロジェクトへの関与と同僚であったリチャード・ノイトラなどとの交流を通じて、すでに建築の工業化に係る知見を得ていたようだ^{注 22)}。そこで、当時国産化が進んでいた石綿スレート板およびテックスという工場生産品に目を付けたのであろう。彼は 1930 年代に 2 つの自邸を含む計 7 つのトロックン・モンタージュ・パウの住宅を手がけ、それらの使用を日本におけるトロックン・モンタージュ・パウの常套句へと押し上げていく^{注 23)}。

ここで興味深いのは、土浦が乾式壁をデザインしながら住生活をデザインしていくことに建築家としての純粋な喜びを感じていた点である^{文 40)}。例えば、土浦は最初の自邸以来、トロックン・モンタージュ・パウの住宅作品において 2 尺×3 尺というモジュールを構法デザインに設定している（図 6-2）。石綿スレート板およびテックスの既製サイズが 3 尺×6 尺であったことから、わざわざ 3 等分して使用したことになる。このようにあえて施工上手前のかかるモジュールを設定したのは、無論住宅全体の形状を系統的にデザインすること以上の目的があった。短辺（2 尺、大凡 60 cm）を縦軸方向にとることで、自在にドアや窓などを拵えようとしたのである。そして、いずれも尺貫法で定義されたそれらの柱間装置と乾式壁の関係が寸法上容易に処理できることを発見したのである^{注 24)}。このようにして、土浦は居間や食堂などの居住スペース、さらには型而工房の展示会に現れたような白い戸棚を持つキッチンに至るまで、住空間並びに設備デザインの全てを 2 尺×3 尺のモジュール・システムの中に落とし込んでいく。換言すれば、土浦は彼自身が思い描く理想の住生活を既製材料の寸法に由来するモジュール・システムで具現化したのであり、そのような乾式壁と住生活の関係こそが彼のトロックン・モンタージュ・パウのイメージだったのである。

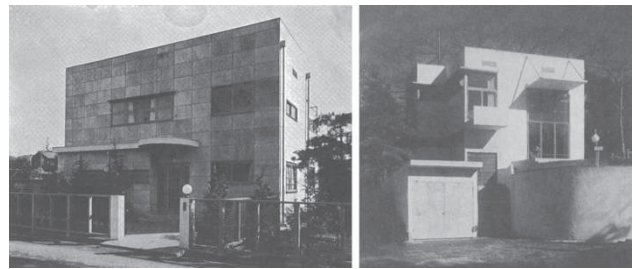


図 6-2 1931 年竣工土浦亀城設計依邸（左）および 1935 年竣工土浦亀城第二邸（右）

そして土浦は、住生活の近代的快適性のために、内外壁の隙間に出来た人目のつかない新奇な空間にでさえ、デザイン上の見えない努力を惜しまなかったのである。『住み良い家の仕様書』のような電気設備の標準を理解さえしていれば、乾式構法により生み出される壁体間は配線のために好都合だったであろう。土浦はそこに配線や配管類を収めるのみならず、断熱材として珪殻を充填するような試みも展開している^{文 41)}。

このような土浦による壁体間の利用において、最も特筆すべきは暖房設備のデザインである。その真骨頂を土浦が晩年まで暮らした 1935（昭和 10）年竣工の 2 番目の自邸に見出すことができる（図 6-3）。この家ではセントラル・ヒーティングが採用されたのであるが、当時日本では住宅暖房に係る知見が全般的に不足していたこともあり、床暖房ならぬ天井暖房という（私たちの目線からすると）奇想天外な暖房設備が生み出されている。吹き抜けの居間の天井内に張り巡らされた温水配管によって天井付近の空気が温められ、温かい空気が積層していくことで家全体が上から下へと温まっていくことが想定されたのである^{注 25)}。



図 6-3 1935 年竣工土浦亀城第二邸の暖房設備の機構図（左）、居間（中）、食堂（右）

さらに、壁そのものがパネルヒーティングとして機能することを意図して、食堂窓下の壁や玄関脇のベンチ下にラジエーターが仕込まれたのである^{文 42)}。これらの隠れヒーティングとも呼び得る設備はすでに彼の 1 番最初の自邸にも見られるのであるが、天井暖房に対する局所暖房として、窓や玄関入口という開口部における冬場の熱損失を補う役割が期待されたのであろう^{文 43)}。このようにして、構法デザインのモジュール・システムにより

望ましい住生活を「型」作っていくことと、乾式構法により生み出される壁体間を利用する設備デザインが完全に融合したのである。

斯くして、土浦は壁体間や天井などを巧みに利用して冬暖かい「住み良い家」を生み出したわけであるが、彼がこのような構法・設備デザイン一体型アプローチを成し得たのにはどうやら師弟関係の影響があるようだ。レイナー・バンハムによれば、住宅の開口部周辺の壁をパネルヒーティング化した（少なくともヨーロッパおよび北アメリカにおける）最初の建築家は、土浦の師、ライトであった^{文 44)}。実際、1908（明治 41）年のライト設計ベイカー邸に早くもパネルヒーティング化手法を見出すことができる。バンハムの推論はこうである。当時アメリカではメール・オーダー住宅のような木質軽量構造が重厚な積石造に取って代わられるようになり、ライトは断熱性の低い組立住宅の保温上の欠点を補う技法が求められたのである。土浦はライトの住宅プロジェクトを手がける中で、このように暖房をはじめとする設備一般を壁体間に落とし込むようなやり方を、期せずして「すでに」心得ていたのであろう。

1930 年代の日本における暖房設備デザインについてはまだまだ研究の余地があるものの、トロッケン・モンタージュ・パウを試みた建築家たちが、市浦や土浦の先例に触発されるかたちで、壁体間の設備利用に目覚めたのは事実のようだ。例えば、山越邦彦は 1933 年竣工のトロッケン・モンタージュ・パウによる自邸（通称 DOMO DINAMIKA）の設計を振り返って、「乾構築の長所として、市浦氏土浦氏が沢山挙げて」いることの他に、「戸袋を簡単に壁の中に作れる事」「配線、配管に特種の便利さを得られること」があると述懐している^{文 45)}。土浦から助言を得ていたという蔵田もまた、戸袋の取り付け易さについて言及しており、型而工房の白いシステムキッチンを自身の住宅作品の中に取り込む上で、壁体間における配管処理に特別の注意を払ったであろうことは想像に難くない^{文 46)}。彼らがそのことをどこまで意識していたかはさておき、トロッケン・モンタージュ・パウの試みは、構法デザインと設備デザインの融合を、おそらくは図らずしも促すことになったのである。

7. 結言

本研究では、住宅改良運動の頃から戦間期にかけて見られた組立住宅および設備デザインの取り組みを俯瞰し、それらに付随した住生活に係るイメージの通時的記述を行った。このような考察を通じて、組立構法および住宅設備が、時々の建築生産体制や時代相の写鏡の如く、絶えず理解され、解釈され続けてきた様子を浮かび上がらせた。従来の柱や梁ではなく大壁や乾式壁で住空間をデザインしようとする試みが展開されるようになると、程

なくして電気設備計画のような設備デザインの発想が芽生えた。このように構法計画と住宅設備計画がほとんど時を同じくして発展を見せたことの背後には、庶民住宅を巡る認識の変化があった。電気ホームの展示が示唆するように、当時思い描かれた新しい住生活像において、従来の家を支配していた家内工業や保存食加工のような生産的要素はすっかり影を潜めた。代わりに、壁で囲われた空間の中に思い描かれたのは、明るさ、暖かさ、清潔さといった近代的快適性のある「住み良さ家」のイメージだったのである。そのような中で、組立構法により生み出される内外壁の隙間が、住宅全体と近代的快適性を約束するあらゆる類の設備を統合的にデザインしていくための「空間」となっていく。1930 年代のトロッケン・モンタージュ・パウの試みは、構法デザインと設備デザインの融合を促す 1 つの契機であったように見える。

建築術としての組立構法それ自体は様々な特性を有する一方、どのような特性に力点が置かれてきたかについて振り返ってみたとき、それは組立構法が語られた文脈においてまちまちであったことに気づく。住宅改良家たちの組立構法に対する主たる関心は、それが生み出すシンプルで合理的な造りやプランにあった。1920 年代中頃になると、南信や新建築社が大量生産可能性に目を付けるようになり、やがて型而工房が大量生産を可能にするためのデザインの規格化や標準化に注力するようになる。そして、土浦、蔵田、山越らにとっては、モジュール・システムに基づき、各室や設備といった「部分」と住宅「全体」のデザインを統合していくための技法こそがトロッケン・モンタージュ・パウだったのである。

土浦とともにトロッケン・モンタージュ・パウの試みに先鞭を付けた市浦健は、太平洋戦争の勃発とともに、1941（昭和 16）年発足の住宅営団に身を置く^{注 26)}。大凡 15 年前に南や新建築社が目をつけた組立住宅の大量生産可能性は、この国策組織にとっても魅力的であった。資材統制下における安定的な住宅供給を目指すべく、同研究部が中心となって、耐力壁によるパネル式組立住宅の開発が行われたのである^{文 47)}。その成果はあくまで試作の域を出なかったが、住宅営団がやろうとしていたことは、型而工房が可合成住宅の提案を通じて試みようとしていたこととほとんど同じであった。どこに生活の「型」を求めたかという点に違いはあったにせよ、両者に共通していたのは、量産化のための標準づくりに対する弛まぬ情熱であった。同研究部の文字通り「規格課」が、構法デザインにおける構造、設備、仕上げの融合を目指していたことも示唆的である^{注 27)}。

終戦後になると、今度は住宅不足という社会問題に対応すべく、引き続き住宅の規格化・標準化・工業化が模索される。実際、住宅営団の技師たちは 1951（昭和 26）年発足の住宅金融公庫等に移り、所定の品質が保証され

た住宅を増やすべく標準設計の作成に取り組むことになる^{文48)}。1960年代初頭に入ると、台頭する住宅メーカーが各社独自のモジュール・システムでプレハブ住宅の量産化に乗り出す一方、内田祥哉が統一モジュールによる住宅部材の部品化・工業化を前提にオープン・システムの方法論を提唱する。斯くして、戦前から戦後にかけて住宅の工業化が連綿と模索され続けるのである。

本研究では、電気ホームのようなモデル住宅から『住みよき家の資料の会』『新標準住居室内装備展』などの百貨店で開催された展覧会に至るまで、メディアが映し出す組立住宅や設備デザインのイメージを追った。そして、それらが映し出す新しい住生活、あるいは理想的な住まいのあり方が、新奇な組立構法や住宅設備と一般の人々をつなぐ回路として機能していたことを浮き彫りにした。

ここで、本研究が対象とする住宅改良志向の強い戦前の事例と、戦後の住宅メーカーによる住宅展示場の設置や「夢のマイホーム」のイメージづくりなどを一概に比較することはできない。他方、もしそれら無くして新奇なプレハブ住宅が売れなかったとすれば、近現代日本の住宅文化におけるイメージやメディアの役割は計り知れないと言うことができる。少なくとも戦前日本における新しい組立住宅や設備デザインを巡るイメージの歴史は、それらが新しい住生活像と結び付けられる過程において人々の関心あるいは憧れの対象となり、ひいては認識上新しい住生活そのものになっていたであろうことを示唆しているのである。

<謝辞>

江戸東京博物館の落合則子氏、松戸市教育委員会の田中典子氏には、それぞれ土浦亀城コレクション、豊口克平旧蔵資料の閲覧に際して多大なるご協力を頂いた。ここに謝意を表する。籠田邸の調査に際しては、同邸が解体される1999(平成11)年までお住まいだった方に対し、2021(令和3)年7月26日にインタビューを行った。貴重なお時間を頂いた同氏に深謝の意を表する。そして、中間報告等の機会を通じて、住総研の研究運営委員会より有益なご助言を頂いた。記して感謝申し上げる。

<注>

- 1) 参考文献6), p. 82, 参考文献7), pp. 11~20
- 2) 参考文献6), p. 71~72, 参考文献7), p. 138
- 3) 参考文献1), pp. 106~107, 246
- 4) 参考文献1), pp. 85~87
- 5) 参考文献1), pp. 118~120
- 6) 参考文献19), p. 30
- 7) 参考文献19), p. 25
- 8) 参考文献16), pp. 142~143, 274~277
- 9) 参考文献24), p. 135
- 10) 参考文献23), pp. 246~248

- 11) 参考文献5), pp. 25~28
- 12) 参考文献23), pp. 250~252
- 13) 参考文献29), p. 428
- 14) 参考文献5), pp. 31~35
- 15) 参考文献5), p. 27
- 16) 参考文献5), pp. 37~38
- 17) 参考文献1), pp. 78~83
- 18) 型而工房は住宅や工芸デザインに係る講習会を開催していたことから、配布資料として作成されたとも考えられる。
- 19) 参考文献41), p. 106
- 20) 参考文献4), pp. 166~176
- 21) 参考文献38), p. 80
- 22) 参考文献4), pp. 84~106
- 23) 参考文献4), pp. 43~45
- 24) 参考文献40), p. 54
- 25) 参考文献41), p. 108
- 26) 参考文献39), p. 128
- 27) 参考文献47), p. 454

<図版出典>

- 図2-1 参考文献10) および 建築画報第四巻掲載写真集, 建築画報社, 1914
- 図2-2 高梨由太郎:文化村の簡易住宅-平和記念東京博覧会第一会場-, 洪洋社, 1922
- 図3-1 参考文献19)
- 図4-1 参考文献28)
- 図4-2 高木氏邸『夏の荘』, 新建築, Vol. 4, No. 9, pp. 50~51, 1928.9 および 鹿姑居, 住宅, Vol. 18, No. 10, pp. 606~609, 1933.10
- 図5-1 松戸市教育委員会:結成80年モダンデザインの先駆型而工房展, 松戸市教育委員会, 2008.11
- 図5-2 参考文献32)
- 図5-3 参考文献33)
- 図6-1 参考文献38)
- 図6-2 俵邸, 国際建築, Vol. 8, No. 3, pp. 73~75, 1932.3 および 国際建築協会編:国際建築住宅図集, 国際建築協会, 1936
- 図6-3 参考文献42)

<参考文献>

- 1) 内田青蔵:日本の近代住宅 第2刷, 鹿島出版会, 1993.7
- 2) 内田青蔵, 篠野志郎:わが国近代独立住宅の変遷過程における米国住宅の影響について-わが国に輸入された米国住宅の動向を中心に-, 住宅総合研究財団研究年報, No. 23, pp. 167~176, 1997
- 3) 高橋彰子, 元岡展久, 長澤夏子:日本の1930年代の木造住宅作品における断熱-建築専門誌に示された断熱萌芽期の建築家による断熱材導入-, 日本建築学会計画系論文集,

- No. 746, pp. 611~621, 2018. 4
- 4) 田中厚子：土浦亀城と白い家，鹿島出版会，2014. 5
 - 5) 豊口克平，島崎信：型而工房とその家具のデザイン研究，武蔵野美術大学研究紀要，Vol. 13, pp. 1~46, 1980
 - 6) 加藤百合：大正の夢の設計家-西村伊作と文化学院-，朝日選書，1990. 1
 - 7) 田中修司：西村伊作の楽しき住家-大正デモクラシーの住い-，はる書房，2001. 10
 - 8) Wright, Gwendolyn : Building the Dream: A Social History of Housing in America, Pantheon Books, 1981
 - 9) Hayden, Dolores : Building Suburbia: Green Fields and Urban Growth, 1820-2000, Vintage Books, 2004
 - 10) 西村伊作：楽しき住家，覚醒社書店，1919
 - 11) 西村伊作：現代人の新住家，文化生活研究会，1924
 - 12) 西村伊作：我に益あり-西村伊作自伝，紀元社，1960. 10
 - 13) 高橋仁：平和記念東京博覧会出品文化村住宅設計図説，鈴木書店，1922
 - 14) 俵元昭編：芝家具の百年史，東京都芝家具商工業協同組合，1966
 - 15) 南博：大正文化，勁草書房，1965. 8
 - 16) 橋爪紳也，西村陽編：につぼん電化史，日本電気協会新聞部，2005. 7
 - 17) 電気ホームの燈器に就て，マツダ新報，Vol. 12, No. 3, pp. 15~20, 1925. 3
 - 18) Nye, David E. : Electrifying America: Social Meanings of a New Technology, 1880-1940, MIT Press, 1990
 - 19) 山本拙郎：調布の電気ホームを御覧ください，電気ホームの会，1924. 10
 - 20) 電気ホーム，マツダ新報，Vol. 11, No. 11, pp. 8~31, 1924. 11
 - 21) 電燈照明と応用の会，マツダ新報，Vol. 15, No. 3, pp. 39~42, 1928. 3
 - 22) 森右作：住み良い家の仕様書，マツダ新報，Vol. 17, No. 8, pp. 2~12, 1930. 8
 - 23) 柏木博：形而工房と合理化のデザイン，同時代建築研究会編 悲喜劇・一九三〇年代の建築と文化，pp. 241~263, 1981. 12
 - 24) 井上祐一，初田亨：建築家・南信の経歴と住宅作品にみられる特徴について，日本建築学会計画系論文集，No. 571, pp. 129~136, 2003. 9
 - 25) 南信：組立住宅の話，新建築，Vol. 2, No. 9, pp. 13~16, 1926. 9
 - 26) 組立住宅に就て，新建築，Vol. 2, No. 9, p. 17, 1926. 9
 - 27) 住宅展覧会と組立家屋，新建築，Vol. 4, No. 8, pp. 8~17, 1928. 8
 - 28) 籠田氏新邸-新建築社設計施工-，新建築，Vol. 4, No. 12, pp. 12~17, 1928. 12
 - 29) 岡山理香：創作活動の展開-蔵田周忠 分離派建築会から型而工房へ-，田路貴浩編 分離派建築会：日本のモダニズム建築誕生，pp. 416~436, 2020. 10
 - 30) 型而工房：肘架椅子の調査・小椅子の調査，豊口克平旧蔵資料（整理番号 240），松戸市教育委員会所蔵
 - 31) 亀野晶子：1920 年代から 1930 年代にかけての住環境に関わる運動からみる型而工房の独自性，デザイン理論，No. 61, pp. 19~33, 2012
 - 32) 型而工房：可合成住宅 1934度提案 No1，豊口克平旧蔵資料（整理番号 159~160，登録番号 20060072，20060013），1934，松戸市教育委員会所蔵
 - 33) 型而工房：提案住宅厨房，豊口克平旧蔵資料（整理番号 158，登録番号 20060071），1934，松戸市教育委員会所蔵
 - 34) アンヌ・ゴッソ，敷田弘子：型而工房における大量生産の方法論，No. 3, pp. 142~148, 2011. 5
 - 35) 形而工房：建築雑誌昭和六年四月山田守氏「生活最小限の住居」より摘鈔，豊口克平旧蔵資料（整理番号 243），松戸市教育委員会所蔵
 - 36) 山田守：生活最小限の住居，建築雑誌，No. 544, pp. 459~500, 1931. 4
 - 37) Nozawa, Shuntaro and Yosuke Komiyama : Discovering the Depth of the Walls: Prefabricated Timber Houses in Interwar Japan, Architectural Theory Review, Vol. 25, No. 1/2, pp. 1~15, 2021. 9
 - 38) 乾構築 西村邸・目黒自由ヶ丘：豊口克平氏設計，国際建築，Vol. 9, No. 4, pp. 80~81, 1933. 4
 - 39) 速水清孝，林憲吾：市浦健の設計と諸活動に関する研究，住宅総合研究財団研究論文集，Vol. 34, pp. 125~136, 2008
 - 40) 土浦亀城：昭和初期に新しい木造住宅を拓く-今も住み続ける自邸について-，すまいろん，秋号，pp. 52~57, 1989. 10
 - 41) 土浦亀城：インターナショナル・スタイルという見え掛りの背後にあった，例えば F・L・ライト，磯崎新編 建築の一九三〇年代-系譜と脈絡-，pp. 89~117, 1978. 5
 - 42) 土浦亀城：第二の自宅の建築，新建築，Vol. 11, No. 3, pp. 41~50, 1935. 3
 - 43) 土浦亀城：暖房工事，土浦亀城コレクション（登録番号 03002238），江戸東京博物館所蔵
 - 44) Banham, Reyner: The Architecture of the Well-tempered Environment, Architectural Press, 1969
 - 45) 山越邦彦：DOMO DINAMIKA，新建築，Vol. 9, No. 10, pp. 192~195, 1933. 10
 - 46) 蔵田周忠：等々力住宅区の一部，国際建築協会，1936. 9
 - 47) 住宅営団研究部規格課：パネル式組立構造に就いて，建築雑誌，No. 687, pp. 453~464, 1942. 6
 - 48) 坪田慎介，篠野志郎，勝木祐仁：1951 年刊行の『木造住宅平面図集』及び『簡易耐火構造・耐火構造住宅平面図集』掲載の「標準住宅設計図」にみる住宅金融公庫草創期の住宅像，日本建築学会計画系論文集，No. 604, pp. 183~189, 2006. 6